

し、北京に到来した琉球使節がこれを知って、自国に導入した可能性が考えられる (Kobayashi 2007)。

本発表の末尾では、さらに麻疹についても検討した。そのアウトブレイク年表を朝鮮、日本本土、琉球列島、蝦夷地について作成すると、いずれでも流行の間隔が長く、東アジアでは一九世紀まで、麻疹がエンデミックになっていたのは中国本土だけだったことを示している。また上記地域では、アウトブレイクがほぼ同時期に発生した場合がいくつもあり、中国本土から朝鮮半島を経由して、日本本土、さらに琉球列島や蝦夷地に伝播したことを示している。琉球王国では外来の麻疹患者の隔離もおこなわれたが、その伝播力の強さもあつてか、天然痘の場合のような本格的制度化までには至らなかったようである。

以上のような中国本土を中心とする疾病空間は、チベットなど他の周辺地域とのあいだでもみられたと考えられる。これらについても類似的な角度から検討する必要があることをあわせて指摘した。

二〇〇九年度

史学研究会大会・総会の記録

史学研究会の二〇〇九年度大会・総会は、一月二日(月)一三時から一七時まで、京都大学文学部新館第三講義室において開催された。

総会では、藤井譲治理事長による挨拶の後、江川温氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告・審議がなされた。

庶務(中砂明徳常務理事)からは、役員交代、今年度の例会実施について報告があり、来年度例会は四月十七日(土曜日)に「民族」をテーマとして開催することが案内された。また、六月の理事会・評議員会で承認された会則の改正案を提示し、総会の承認を得た。

編集(吉本道雅常務理事)からは、『史林』の刊行について報告があつた。

会計(泉拓良常務理事)からは、二〇〇九年度予算の紹介、科研費申請の準備についての報告があつた。

広報(谷川稷常務理事)からは、ホームページの一層の充実を図るべく、準備を進めている旨報告があつた。

これに引きつづき、公開講演が行われた。講演は次の二本であつた。

紀平 英作氏

「歴史とは何か」

小林 茂氏

「近世東アジアの疾病空間」

講演者紹介と司会とは、それぞれ永井和理事と田中和子理事がつとめた。講演内容は本号に掲載されているので参照されたい。近年まれにみる盛況で、一五三名の参加者を得ることができた。

公開講演ののち、小山哲理事が閉会の辞を述べた。大会終了後、オープンな立食形式的懇親会が開かれた。

(文責 中砂明徳)

史学研究会会則

(二〇〇九年一月二日改正)

第一条 本会は史学研究会と称する。

第二条 本会の事務所を京都大学大学院文学研究科内に置く。

第三条 本会は広く歴史に関心を持つ者が集まり、史学・地理学・考古学に関する